

## 夫の介助をとおして、 心通うほんとうの夫婦に。

佐倉教会 葉久枝さん

平成26年夏、葉久枝さんの夫は肝不全と脳梗塞を併発し緊急入院。原因となった腫瘍の摘出手術で命は助かったが、脳の損傷により重い障害を抱えてしまう。気に入らないことに大声を出し、リハビリも暴れて抵抗するため足腰は弱まり、日常生活の介助が必要になった。葉さんは、夫や娘の世話、家事を終えた後に深夜まで働き家族を支えたが、自分ばかりが苦労していると、心はささくれた。仏教を共に学ぶ仲間から「だれもが先祖から脈々とつづく命を受け継いでおり、生きているだけで尊い存在」といわれ、夫と歩んだ日々を顧みる。家族三人で暮らせるのも、夫が生きていてくれるから——。「二度とないこの一瞬を大切にしよう」と思えるようになった。いま、葉さんは、介助をとおして、心が通うほんとうの夫婦になれたと感じている。



## 悠々として、心安らかに

江戸時代の終わり近くのこと、近重善太郎ちかひげぜんたろうという人もとへ、以前本山参りの際に一泊させてくれた信仰仲間が訪ねてきました。ところが、その人はいきなり善太郎を、着物を盗んで持ち去ったところぼう呼ばわりして、激しく罵ります。すると善太郎は、身に覚えがないにもかかわらず、丁重に詫言ちやごびて、着物の代金を渡したうえ、仏壇に供えた草餅を土産に持たせました。

信仰仲間が家に帰って、みんなで草餅を食べようとしたときです。その家で働く娘が、なぜかうつむいたまま、手にもとりません。「どうして食べないのか」と尋ねると、娘は「善太郎さんが盗ったと話しましたが、あの着物を盗んだのは私です」と、罪を打ち明けたのです。

この善太郎の対応には感心するばかりですが、どうしても釈明しないまま、事態を受け入れることができななう。私は、「やましいことは何もない。仏さまはすべてご照覧しょうらんなのだ」という善太郎の絶対的な「信」によるものではないかと思えます。また、その場で身の正しさを申し立て、相手をやりこめるのはつまらないこと、と考えたのかもしれない。

この話は、「草餅説法」といいます。娘さんの心を解とかした善太郎のあたたかさに、悠々として、心安らかに生きる信仰者の神髄しんまゐを見る思いがします。